

問答連

その廿一

瓦版

哲学カフェ 第四回

八月二十五日(土)二時

会場：雑貨と喫茶「ムーレック」

どうすればほかの人と

わかりあえるのだろうか？



毎回テキストに使って『子どもの難問』(矢野茂樹・編著)について少し紹介しておきましょう。この本は、中学受験の大手塾「四谷大塚」が発行している保護者向けの月刊広報誌『Dream Navi』に連載されたものを一冊の本にまとめたものですから、難しい議論を積み重ねるようなものではなく平易な文章として書かれています。しかし、その内容は決して安易な「問い」ではなく十分大人の「対話」に絶え得るものです。

そこで今回は「どうすればほかの人とわかりあえるのだろうか？」をとりあげます。このテーマは、「どうしてほかの人とはわかりあえないのだろうか？」と逆か

らの思考もできます。実に「分かる」ことの不思議さを考える材料としても面白いものだと思います。

ということ。今回は当日配布する資料から参加者のみなさんの興味や関心をひいた「ことば」を手がかりとして考えていきます。もちろん終着点は見えないミステリーツアーです。是非、私たちとご同乗ください。

* * * * *

あるとき私たちは、自分のことをほかの人にわかってもらう難しさに気づく。逆に、ほかの人のことをわかる難しさにも。このとき、私たちは何に気づいたのだろうか。そこで出会った難しさの正体は何なのだろうか。「わかりあう」ということ、「わかる」ということ、その意味、その難しさの意味。この問いはこうして、自分と他者との関係のあり方を見つめる扉になる。「どうせわかりあえないしな」と、したり顔で扉を閉じてしまっただけではない。(『子どもの難問』より)

*

【世話人 野崎からのメッセージ】戯曲作家であり演出家の平田オリザは「日本のコミュニケーション教育は、あるいは従来の国語教育でも、多くの場合、それは「わかりあう」ことに重点が置かれてきた」(『わかりあえないことから』講談社現代新書)と書いています。教育に限らず「コミュニケーション能力」の多寡が若者には求められているようです。つまり就職するための有力なアイテムとして、雇う者・被雇う者ともども認識されているようです。私は、「わかりあえない」に耐えながら「わかりあえる」ことを求めるといふ立場に立ちたいと考えているのですが…。

今後のスケジュール

第五回 九月二日(土)二時から

「心と身体」 氣功の本質

ゲストスピーカー

第六回 一〇月二七日(土曜日)

特別企画 あなたが作る「哲学カフェ」

【お知らせ】特別企画「あなたが作る『哲学カフェ』」に取り組んでみようと思えます。「世話人」vs「参加者」という固定した構図を「参加者(世話人も含めて)」「手作り「哲学カフェ」でアイスブレイク(固定観念を壊す)してみようと考えています。ご意見をお願いします。

哲学カフェ 第三回

「広場」を探そう 報告



プラタモリでおなじみの梅林さんは、京都や世界のさまざまな場所を画面に映しながら、「広場とは何か?」というテーマを中心に、お話されました。興味深いお話が、もりだくさんでしたが、特に、広場という言葉には、1. 広い空間。2. 公共の場。3. 話し合いや意思疎通が行われる場。などの意味があり、この2や3の意味に、いろいろな思い(たとえば、民主主義と広場etc.)をこめることで、最近の「広場論」が展開されていること。建築家の広場論は、このような視点から、代官山の蔦屋書店の本を買わなくて

も本を読めるオープンスペースや会社のビルの中の子育てスペース、コーワーキングスペースなどをも「広場」としてとりあげているが、そこには、特権的な消費性を感じ、違和感がある。ここに容易に入れない、入りにくい人たちがいるのではないか？ある種の上から目線やおせっかいな感じを受ける。むしろ人々が自生的に作り上げる広場に注目したい。そういう意味では、街路型の広場（街路の一角が広場となる）、非公式な広場などに魅力を感じる。清水寺の街路の一部、伏見稲荷神社などの一部に、いわば都市のふくらみとしての非公式の広場、たまり場がある。道路の一部に作られる地藏盆の広場、歩行者天国の空間もそうだ。また、西洋型の典型的な広場にあたるものは、日本では、寺社の境内の空間がそれではないか。建築家が意図的に作り上げたものとしては、京都駅の大階段の踊場的な空間があるが、利用者としては、違和感もある。街歩きの会では、自分では選べないものとして、他者としての風景や地形に出会う、そこには、さまざまな時期の歴史的な痕跡がとなりあって存在し、その土の履歴を読み込みながら、同時に自分の人生の履歴、高低差、上昇と下降を重ね合わせて感じることがある。その会には、生きにくさを感じている人たちも参加しているが、その人たちの居場所にとっては、なにより、安全感が大切で、気楽に入り、離脱できることが必要ではないか。といったお話が、とても印象に残りました。

その後、このようなお話をともに、広場が民主主義とは逆に、権力によって利用される危険（ex・明治神宮外苑での学徒動員）も考えるべきではないか？広場を作り出した主体によって、そこに入れる人の資格

が限定されるのではないか？空間としての広場論の底にあるのは、共同性をどう取り戻すかという関心であって、そこでは、民主的な討論を可能にする空間、つながりや癒しを感じる空間などができる空間、集団的な一体感を感じられる空間などの観点が混在しているのではないか。かつて、子供たちが自由に出会い、遊べた広場的な空間が、寺社の境内も含めて、どんどん、管理化されていることが大きな問題ではないか。街歩きを含め、「旅行者」として出会うという視点での広場論の可能性は？寺社などの聖なる場所がもっていた開かれたシエルターの役割をもう一度取り戻すことはできないのか？そして、東本願寺のホームレスの人たちとの関わりの歴史の紹介。広場論は、どちらかといと男性的な視点で語られてきたのではないか、女性の視点、井戸端会議的な視点をどう考えるのか？など、さまざまな視点から、活発な話し合いが行われました。また、具体的な京都の町なみについても、失われた出町の広場、マンガン鉱山あとの洞窟で遊んだ思い出などが語られ、京都の町の変遷に思いをはせることがで



タイランド チェンマイ ワロロット市場

きました。この哲学カフェも、ある種の広場を取り戻す試みといえますが、参加者の中に、巡り堂書店（広場？読書会などのとりくみをされている方もおられました。今日の続きをまた、ぜひしたいなあと思わせる充実した話し合いになりました。

講師の梅林さん、参加者のみなさん、ありがとうございました。（N）

参加者の感想から

公共性の問題に深く関係していると思いました。そもそも広場とは公共なのか、とか、その広場は、いかなる場所で、その利点は何なのか等考えることは沢山ありそうです。公であることが利点であるともいえるし、公を居場所としてとらえてよいのかなど、面白い問題がたくさん浮かんできたので、公共性に関して自分で調べたいと思いました。

出町広場のおもいで…むかし酔漢がはを落としたという。古い電池をもって夜更けの榊形通りを酔漢に足をつけてしこをふんだ。ここだここに落とした！はなかつた。酔漢よ あなたの落し物ははでしたか。

